

第一回リレー小説「第四学群」赤組二番手

阿笠多男

僕は第四学群について調べるために、中央図書館へと向かった。さすが大学の図書館というだけあって、高校までのものとは規模が全く違っていた。真新しい学生証を機械にかざすと、ゲートが音を立てて開いた。

「困ったときは図書館のレファレンスサービスを使うといいわ」

僕は姉がつねづね言っていた言葉を思い出した。姉はこの大学に、図書館情報学を学びに入学した。小さい頃から本が好きだった姉は、司書になることを目指していた。姉はことあるごとにレファレンスサービスの重要性を僕に説いていた。僕はあまり図書館に興味がなかったので姉の話聞き流していたが、「レファレンス」という言葉だけはなぜか耳に残っていた。

「すみません、第四学群について調べているのですが」
僕が第四学群の名を出すと、レファレンス担当の職員
の表情が変わった。

「第四学群についてはお答えできません」

「僕は姉の死の真相について知りたいのです」

「もしかして、秋の弟さん？」

僕は驚いて訊ね返した。

「姉のことを知っていますか」

「ええ、私は秋とずっと友達だったから」

「姉の話聞かせてもらえませんか」

「今日の夜六時に大学近くの喫茶店で会いましょう」

そう言っ、彼女は僕に名刺を差し出した。彼女の名は、「香坂恵美」といった。

図書館を出た後、僕は大学近くの喫茶店で三輪と一緒に香坂がやって来るのを待った。

「恵美と秋と俺は同じサークルに入っていたんだ」

「文芸部？」

確か姉は文芸部で小説を書いていると前に言っていた。

「ああ、そうだよ」

三輪はどこか懐かしむような感じで答えた。

「今はもう、なくなっただがな」

三輪は一拍おいて、こう続けた。

「秋が消えた後、文芸部は解散させられた」

「どうして」

「それは俺にも分からない」

「お待たせしました、ウインナーコーヒーとエスプレッソになります」

髪を後ろで束ねた店員が飲み物を運んできた。

「秋もよくここでウインナーコーヒーを頼んでいたよ」

僕がホイップクリームをかき混ぜていると、三輪がぼそりと呟いた。

「姉の影響を受けてウインナーコーヒーを飲むようになったんだ」

「そうか。ちなみに、なぜウインナーコーヒーって言うか知ってるか」

三輪が挑むような目で僕に訊ねる。

「ウイン発祥のコーヒーだから」

僕は姉から聞いた知識をもとに答えた。

「よく知ってるんだな。俺は最初秋がウインナーコーヒーを頼んだ時、コーヒーにウインナーが入っているのを想像したよ」

「ずいぶん姉と仲が良かったようで」

「あんたには敵わないよ」

三輪は自嘲するように言った。

「お、来た来た」

ふと見ると、香坂が息を切らせて喫茶店に入ってきた。

「遅くなってすみません」

「恵美、久しぶり」

「相変わらず元気そうね」

香坂が柔らかな笑顔を浮かべた。

「来て早々言うのもなんだけど、秋は死んでないわ」

「え……」

僕はしばらくの間言葉を失った。

「秋はどこかにある第四学群にいるわ」

「おいおい、それは俺も聞いてないぞ」

三輪も驚いたように香坂を見た。

「私が図書館のネットワークを使って調べたの」

香坂は澄ました顔で言った。

「ただ、その第四学群がどこにあるかはまだ分かっていない」

「松美池の底とかはどうなんですか」

僕が身を乗り出して香坂に訊ねた。

「警察が調べたときには、何も見つからなかった」

「でも姉さんは、松美池に飛び込んで、それから消えた」

「確かに普通に考えれば矛盾してるわね」

香坂は僕の目をじっと見てこう言った。

「よく覚えておきなさい。この大学に普通は通用しないのよ」

その言葉を聞いて、僕は捉えようのない恐ろしさを感じた。自分で言うのも変かもしれないが、僕は今までしごく「普通」に生きてきた。普通に学校に行き、普通に友達と話し、普通に恋愛もしてきた。今までの僕にとって、目に映る全てが「普通」だった。少なくとも姉がいなくなるまでは。姉がいなくなったことによって、僕の世界は大きく変わってしまった。

「だとしたら、第四学群を見つけることはできないのか」

僕が抱いていた疑問を代わりに三輪が口にした。

「私が思うに、第四学群は物理的な世界ではないと思うの」

「それはいったいどういうことだ」

三輪がまるで分からないというような声で訊ねた。僕も香坂の言っていることが理解できなかった。

「この大学が創られた当時、この辺りには何もなかった。3Sという言葉が生まれたことから分かるようにね。何も楽しみがない学生たちは、どうにかして自分たちで楽しみを創ろうとした。そうして生まれたのが、第四学群なの。学生が物理的に学群を創るのは不可能だったから、学生は何者にも邪魔されることがない世界に自分たちの学群を創った」

「そんな世界がはたして存在するのかい」

三輪は香坂の話をあまり信じていないようだ。

「第四学群は私たちの精神世界に存在しているの」

「精神世界？」

僕と三輪は同時に訊き返した。

「だって、姉さんは第四学群へ行くために松美池に飛び込んだんじゃ」

香坂は少し考えてから言った。

「秋にとっては、松美池に飛び込むということが、第四学群へ行くことと同義だったんじゃないのかしら」

「それで、秋は実際に第四学群へ行ってしまった」

三輪は半信半疑といった様子で言葉を続けた。

「そんなことが実際に起こり得るのか」

「まあ、私が今まで話したことは一つの仮説にすぎないけどね」

香坂はポケットから煙草を取り出してライターで火をつけた。

「姉さんがこっちの世界に戻ってくることはないのですか」

僕は力なく香坂に訊ねた。

「秋は自分の意思で第四学群に留まっているのかもしれないし、戻ってきたくても何らかの理由で戻れないのかもしれない。それは私にも分からないわ」

香坂は煙草の火を灰皿でもみ消して言った。

「人の心なんて誰にも分からない」

僕は灰皿から立ちのぼるかすかな煙をぼんやりと見つめていた。

「なあ、あんたどう思う」

帰り道、三輪が僕に問いかけてきた。

「正直言ってよく分からないな」

「俺もだよ」

三輪も僕と同じように感じているようだ。

「俺なあ、秋のことずっと好きだったんだ」

三輪がぼつりぼつりと語り始めた。

「秋は俺みたいなのにも優しく接してくれて、とてもいい奴だった」

「告白はしたのか」

「いや、できなかったよ。俺なんて秋と違って授業にも真面目に出てないし、こんな変な格好してるし、秋と

一緒にいる資格なんてないさ」

三輪は珍しく落ち込んでいるようだ。

「だったら、姉さんに会えることを信じて頑張るしかないじゃないですか」

僕は三輪を励まそうとした。

「でも信じることって意外と難しいんだよな」

三輪の気分は相変わらず沈んでいるようだ。

「そんなこと言ったら姉さんに笑われるな」

「それもそうだな」

そう答えた三輪の顔には、久しぶりに笑顔が戻っていた。

それからしばらくの間、僕は三輪や香坂と会うことなく日々を送っていた。授業も本格的に始まって以前よりも忙しくなり、少しずつ姉のことを考えることも減っていった。第四学群は、僕の日常から少しずつ遠ざかっていった。

そんなある日、僕はいつも通り大学に向かって自転車を走らせていた。松美池の横を通り過ぎようとしたとき、かすかに姉の声が聞こえたような気がした。気のせいだと思いつつそのまま自転車を走らせようとしたが、意に反して僕の足はペダルを漕ぐのをやめてしまった。松美池の中を覗いてみると、そこには見たことのない世界が広がっていた。

「姉さん……」

僕はいつの間にか、池の中へと引き込まれていった。

気がついたら、僕はベッドに寝かされていた。

「久しぶり」

声をかけてきたのは、いなくなってしまった姉さんだった。

「姉さん」

僕は隣に立っている姉さんの手を握った。

「家族はみんな元気？」

僕は返答に困った。姉がいなくなっただけから、両親はすっかり憔悴してしまった。

「元気なわけないか」

言葉に詰まっている僕を見て、姉は何かを察したようだ。

「遅くなっちゃたけど、入学おめでとう」

「ありがとう」

五年ぶりに見る姉は、以前と少しも変わってないようだった。

「ここはいつたい……」

「地下組織・第四学群よ」

姉さんは胸をはって答えた。

「ここが、第四学群なのか」

「四月から私が第四学群の学群長になったの」
姉は嬉しそうに言った。

「コーヒー飲む？」

そう言っただけは僕にコーヒーを淹れてくれた。

「本当はホイップクリームがあつたらよかつたのだけ
ど」

姉はとても申し訳なさそうにしていた。

「ワインナーならあるけど、どうする？」

姉はビニール袋からワインナーを取り出した。

「今は遠慮しておくよ」

「そっか。じゃ、私が食べるね」

そう言っただけ、姉はワインナーをおいしそうに食べ始めた。それを見ていたら、なんだかお腹がすいてきてしま
った。

「魚肉ソーセージでも食べる？」

姉さんがちょうどいいタイミングで僕に聞いてきた。

「うん」

僕は姉さんからもらった魚肉ソーセージを一口かじ
った。すると、今までに食べたことのない味が口の中に
広がった。

「それは松美池の鯉で作ったソーセージなの」

僕が不安そうに姉さんを見ると、姉さんはこう続けた。

「大丈夫よ、別に除籍になったりしないから」

僕は安心して、魚肉ソーセージを満喫した。